

学校インターンシップと教育実習の連結：その効果についての考察

小 倉 美津夫

日本福祉大学 国際福祉開発学部

On a Link Between a School Internship and a Teaching Practice: Consideration of the Effectiveness of the Link

Mitsuo OGURA

Faculty of International Welfare Development, Nihon Fukushi University

Keywords : 教員養成, 学校インターンシップ, 教育実習, 学校現場, ボランティア, リフレクション

Abstract

The aim of this paper is to introduce how the Faculty provides its students with a program of a school internship as one of the subjects for the teacher-training course and to consider the effectiveness of a link between internships at schools and teaching practice in terms of some reflections on the internships from the students and the teaching practice. A questionnaire survey was conducted in order to show how effective the internships were to the students' growth and how helpful the experience of the school internships was for their teaching practice. The result describes that the subject of the school internship is completely important and indispensable for the student self-development and the assessment of their suitability for a school teacher.

Keywords : teacher training, school internship, teaching practice, field of education, volunteer, reflection

1. はじめに

国際福祉開発学部は、2008年度に新設学部として発足した学部である。この学部が発足する以前から、大学自体では、企業向けインターンシップ研修を正課の科目として実施し、過去に学校でのインターンシップに取り組む学生が数名いた。このインターンシップは、夏休みに10日間以上、40時間以上勤務し、インターンシップ研修レポートを提出することで単位を認定していた。インターンシップは3年生科目であるので、当該学部では

2010年度から、学校インターンシップを学部での正課科目として設定し、教職課程履修3年生を対象に「インターンシップ」を積極的に勤めてきた。

正課科目として設定し、積極的に履修を推奨した理由は、大きく分けて3つの理由があった。ひとつは、小中高生時代に出会った教師の人間性や教師の日常を通して形成された教師のイメージに基づき、教職を志向してきた学生たちが、4年生で実施する教育実習では目にすることができない、そして体験できない教員の仕事を、3

年次の学校におけるインターンシップで、教員の助手として経験することにより、教員の仕事とは何かを学び、学校現場のさまざまな仕事を知ることを行っていた。教育実習は「学生が学校現場に入る」という点では、インターンシップと変わりはないが、教育実習で学ぶことは、主に専門とする教科指導とホームルーム担任が担当するクラスでのクラス運営と、わずかながらそのクラスの生徒理解が中心である。これだけの体験で、教職のすべてを理解することと習熟することができるわけがなく、教員の仕事には、教育実習を履修する学生には想像できないほどの仕事がある。

このことに学生たちが気づき、自己の教員への適性を見極め、学生の時から教員としての使命感・責任感などを学ぶことが重要であると考えた。

二つ目は、倍率が高く、難しいと言われる教員採用選考試験に合格し、希望に燃えた新規採用教員が、正式採用前に離職する傾向が年々増加している現状を鑑み、教育の現場において、教員たちが日々の多忙の中でさまざまな課題に懸命に取り組んでいる姿を観察し、教員の助手として働き、教育という仕事のすばらしさや大変さを感じてもらうことを行っていた。

三つ目は、現代社会の傾向として、若者が職業人として持つ基本的な能力が低下していること、職業意識・職業観の未熟さ、身体的に成熟していても精神的・社会的自立が遅れる傾向などが指摘されている。社会的・職業的自立や、大学から社会・職業への円滑な移行に向けた支援は、関係機関が連携して取り組むことが必要であり、その中で大学が果たす役割として、教職志望者には教育実習以外に学校インターンシップが不可欠と考えた。

2. 若年教員の離職とその理由

学校教員全体で平成22年度文部科学省「学校教員統計調査」の結果をみると、平成21年度間に「病気」のために離職した人数が、公立小学校で609人、公立中学校311人、公立高等学校117人である。平成13年度調査の結果では、公立小学校212人、公立中学校124人、公立高等学校89人である。特に、小学校では397人、中学校においては187人離職者数が大幅に増加している。また、「病気」を理由にして離職した教員のうち、「精神疾患」で離職した人数をみると、公立小学校では、平成21年度間に離職した609人中349人と57.3%を占めており、中学校では、311人中181人の58.2%も占め

ている。（詳しくは表1～表3を参照）

新任教員の離職については、平成23年度「公立学校教職員の人事行政状況調査」（グラフ1）でみると、平成12年度は33人であった。しかし、これが平成23年度には299人へと、9倍以上に増加している。その後、平成20年度304人、平成21年度302人、平成22年度288人、平成23年度299人と推移している。離職理由は、「病気」、「家庭の事情」、「職務上の問題」、「その他」である。なかでも「病気」を理由とする離職者が平成15年度の10人から5年後の平成20年度には93人、平成23年度には118人へと実に10倍に急増している。「病気」を理由とする離職者のうち「精神疾患」によるものの数は、平成21年度から調査を行っているが、平成21年度83人、平成22年度91人、平成23年度103人と年々10ポイントずつ増えている。

さらに、新任教員の死亡数の増加が深刻である。平成16年度以降、5～6人の新任教員が正式採用を得る前に死亡していて、その中には自ら命を絶ったものもいる。たとえば、平成16年9月、静岡県内の小学校の新任女性教員（24歳）が車の中で焼身自殺、平成17年には、埼玉県越谷市の小学校で新任着任後わずか3週間で男性教員が学校の図工室で自殺している。平成18年6月には、東京都新宿区立の小学校で、新任女性教員が仕事に追われ、保護者の苦情に悩んで自殺している。この教員は病院に通い、「抑鬱状態」と診断され、「無責任な私をお許してください。すべて私の無能さが原因です。」という遺書を残している。同年10月には西東京市の小学校女性教員（25歳）が、自宅アパートで首をつって自殺している。

これらの離職や自殺の直接の理由は明らかになっていないものが多いが、多忙感、精神的ストレス、同僚性の欠如、孤立化、管理の強化などが考えられる。

新任教員を取り巻く上記のような教育現場の現状において、教職志望者たちが念願の教員となった時の定着指導の一端を大学時代に丁寧に行うことが重要である。新卒の採用選考の際、重視される点は、教育に対する熱意・意欲、豊かな人間性と高い倫理観、幅広い教養と専門的な知識・技能、行動力・実行力、協調性、使命感・責任感、社会人基礎力などであるが、合格したものはこれらの知識・技能・能力などを身につけていることが認められたわけである。しかし、教科や校務分掌の指導計画案、初任者研修、研究授業の準備と実施、いじめ、不

表1 離職の理由例 離職教員数 (公立小学校)

(単位:人)

	定年(勲褒を含む)のため	病気のため	死亡		転職のため	大学等入学のため	家庭の事情のため	職務上の問題のため	その他	計
			うち精神疾患							
平成12年度間	5,837	212	...	207	738	19	2,115	9,128
平成15年度間	8,891	316	...	202	1,053	15	2,608	13,085
平成18年度間	9,873	370	...	217	1,136	32	2,870	14,498
平成21年度間	10,357	609	349	219	1,289	26	1,682	112	2,157	16,451

(注) その他には、教育委員会への人事異動を含む。

表2 離職の理由例 離職教員数 (公立中学校)

(単位:人)

	定年(勲褒を含む)のため	病気のため	死亡		転職のため	大学等入学のため	家庭の事情のため	職務上の問題のため	その他	計
			うち精神疾患							
平成12年度間	3,632	124	...	152	880	28	1,492	6,308
平成15年度間	3,842	177	...	155	855	20	1,554	6,603
平成18年度間	3,665	229	...	126	1,006	24	1,701	6,751
平成21年度間	4,453	311	181	137	1,021	24	638	94	1,460	8,138

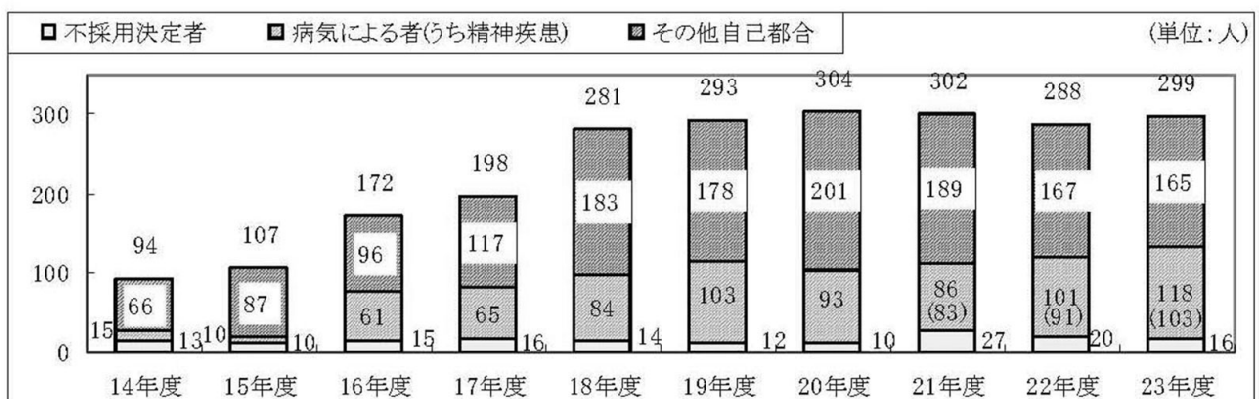
(注) その他には、教育委員会への人事異動を含む。

表3 離職の理由例 離職教員数 (公立高等学校)

(単位:人)

	定年(勲褒を含む)のため	病気のため	死亡		転職のため	大学等入学のため	家庭の事情のため	職務上の問題のため	その他	計
			うち精神疾患							
平成12年度間	5,580	89	...	159	352	20	753	6,953
平成15年度間	4,584	89	...	139	380	19	985	6,196
平成18年度間	3,870	103	...	121	360	17	1,056	5,527
平成21年度間	4,168	117	69	133	335	17	227	31	728	5,756

(注) その他には、教育委員会への人事異動を含む。



(注) 病気を理由とする依願退職者のうち精神疾患によるものの数は、21年度から調査

グラフ1 条件付採用期間を経て正式採用とならなかった者(依願退職者)の数の推移(過去10年間)

登校、校内暴力、学級・授業の荒れ、学力低下、保護者の苦情対応、業後遅くまでの部活動指導など、仕事に追われる毎日で、勤務時間内に終わらない仕事に追われている。これらの結果、ストレスなどの原因で抑鬱状態になり、通院、ついには休職、離職にまで追い込まれていくことになる。

本学部で実施している学校インターンシップは、こういったことの予防の役割を大いに果たしている。この論文の中で本学部のインターンシップの内容と方法を紹介することにより、それを実証していく。

3. 教育実習と学校インターンシップ

教育実習の目的については、すでに明白であるが、ここに簡単にまとめておくことにする。

教育実習とは、大学で学んだ教育に関する理論を生かしつつ、学級担任や教科担当、教科指導や生徒指導に真摯に取り組みながら、教師として必要な実践的指導力の基礎を体験的・経験的に学ぶことを目的としている。

学生の身分でありながら、現場教師の指導のもと、今まで学習してきた教育の理論が実践化されて、教材研究や人間理解の必要性・重要性、協力・受容・支援の重要性、教育定義の再確認、教職への理解と自覚の必要性などが学習されていく過程である。2~4週間、学校現場に身を置き、身分上教師となって、実際の教育活動に取り組みながら、学校、教師、子どもなどについて、機能・職務・発達特徴の面を体験的・経験的に学ぶ。教育実習は、事前指導、教育実習、事中指導、事後指導からなっている。事前指導では、教育実習への関心や意欲を高め、意識を改革するために、教育実習の目的や意義、教育実習の心得、授業の組み立て方、学習指導案の書き方、学級経営方法、児童・生徒の理解と把握の方法などについて具体的に学習している。教育実習では、観察・参加・教壇実習があり、児童・生徒についての理解を深め、教育活動、教育施設・設備、教育環境、指導方法などについて観察したり、実習校での教育活動に直接積極的に参加したり、それまでの観察や参加の経験を生かし、予め定められた教科の内容に関する学習指導案に基づいて、指導教師と同様に教壇に立ち、実際に児童・生徒を指導する。事中指導では、教育実習中に大学の指導教員から教育実習内容や教育実習を行う中で抱えた問題や課題に関する適切な指導を受ける。事後指導では、教育実習の最終週で開催される反省会や研究協議会において、問題

意識や課題意識が相互に提示される中で、教育の理論と実践が再確認・再統合される機会となる。

一方、学校インターンシップとは、学校におけるボランティアや教育実習とは異なり、主として教職を志望する大学生が広く社会経験を積むために、ある一定期間、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校などの教育現場に入り、学校現場における授業補助・課外活動・行事・事務などの実務的な経験をすることである。教育実習が教科指導を中心としているのに対し、学校インターンシップは教員のさまざまな仕事に接することで学校現場をよりよく知ることができる。学校インターンシップは、学校現場で教員の指導を直接受けつつ、子どもたちの手助けをし、教え導くという大学の教室の中では得られない体験を通して、学生にとって、人間的に成長するよい機会でもある。

4. 学校インターンシップで育成される実践的指導力

従来の教育実習では、指導教員の授業を観察すること、ホームルームの生徒理解、授業実習、授業についての省察会（リフレクション）を持ち、主に教科指導力の向上に限定されていることが多い。それに対してインターンシップでは、教員の助手として個々の児童・生徒に対する支援や、別室登校の児童・生徒への指導、授業準備や教材準備の手伝い、担任教員の学級事務の補助など学校教育のさまざまな業務に携わることが中心となっている。多くの場合、毎週×曜日のように非連続的に学校へ出かけることから学生たちや指導教員たちは授業の計画が立てにくい。授業についての本質的なことは教育実習で、教育の現場で行われている仕事は（授業実習を除く）インターンシップで、という形である。

現場で必要とされる実践的指導力に関して、授業力は教育実習で磨かれ、生徒指導、校務分掌、保護者対応などの場面で、その場にに応じたさまざまな教師の仕事を観察したり、補助したりする状況判断力や迅速な対応力などが身につく。インターンシップでは、事前指導、事中指導（大学における授業）、省察会や報告会の事後指導を通じて、学びの共有化、深化、理論化する機会を持っている。

5. 本学部における学校インターンシップ

5.1 研修先の開拓

学校インターンシップを始めるといっても、受け入れ先がなければ実現できない。同僚教員の紹介で近隣の半田市教育委員会を訪れ、学校インターンシップの意義と目的、そしてその効果について説明を行ったところ、当該教育委員会も積極的に協力・支援していただけることになった。半田市教育委員会は、市内小学校と中学校の校長会で受け入れ校の募集を行い、一方で筆者の以前からの知り合いである愛知県立阿久比高等学校の校長、日本福祉大学付属高等学校、美浜町立野間中学校へ協力を依頼した。半田市内小・中学校からは、14校延べ30人のインターンシップ研修生の派遣依頼が出され、その他の学校からは各1人の派遣依頼があった。合計で33人の要請があったが、教職志望者が7人ということで、派遣できないという断りの手続きをとらざるを得なかった。結局、小学校2人、中学校3人、高等学校2人がインターンシップに取り組むこととなった。なかには、前期に中学校へ、後期に小学校へ、インターンシップ研修生として出かけていったものもいた。さらには、同一学校に1年間インターンシップを勤めたものもいた。

5.2 インターンシップ研修日の日程調整

一般企業のインターンシップでは、基本的に夏季休業中に行うことになっているが、学校インターンシップは夏季休業中では研修の意味がなく、学校が休みではない期間に行うこととし、履修学生と受け入れ校との間で研修日を相談しながら決定した。履修学生は、平日は大学での授業に出席しなければならないので、時間割をみながらの調整が行われた。科目の単位認定規定が、実働10日以上、40時間以上であるため、さらに受け入れ校の所在地が大学から1時間くらいのところにあることから日程調整に少なからず困難があったり、工夫が必要だったりした。

5.3 実施内容

1) 履修登録とガイダンス

4月の履修登録期間に、「インターンシップ」に登録した7名に、インターンシップ研修プログラムの説明と事前指導を行った。

2) 「インターンシップ」のねらい

この科目を、教職を選択肢とするキャリアデザイン教育と定め、教職志望者が受け入れ校の理解と協力・支援により、学校における就業体験の機会を得て、4年次教育実習の短い期間では体験できない、教員のさまざまな仕事・職務について理解を深め、視野を広げ、人間的成長をはかり、自律した教員に求められる資質や技能を知り、体得することを目的とした。

3) 学習目標

以下のように5つの学習目標を設定し、ガイダンスで徹底した。

教職志望者が、学校現場を広く体験し、教員の職務内容を適切に理解することができる。

教職志望者が、実践的な力を磨くことができる。

教職志望者が、年少者とふれあうことで人間的成長を促進できる。

教職志望者が、児童・生徒を見る目、人間に対する理解力を伸ばすことができる。

自分の習得している英語指導力が、どの程度学校で通用するか試すことができる。

4) 授業内容

事前指導においては、インターンシップ研修生としての心構え・身だしなみ・言葉使いなど、基本的なマナーを指導し、受け入れ校とのマッチングを行った。受け入れ校との打ち合わせは、受け入れ校の事情により授業外で実施した。

受け入れ校でのインターンシップ1日目以降の授業は、毎週1コマ設定し、実施したその週の研修とその週の授業をセットにして実施した。授業では、学生が行った研修内容、研修日に抱いた疑問点、研修の感想、次回の研修日の課題などを、クラスで発表しあい、ディスカッション等を行い、最終的には指導教員が詳細にわたり、問題・課題となったことがどのような法令に基づいているか、それらの問題・課題をどのように解決していくか、次の目標は何かなど指導を重ねた。さらに、学生が発表した内容や学んだこと、授業では語りきれなかったことなどを、学内のSNSのfuxiに記録を書き込み、学部内の他の教員や教職志望者の下級生にも読んでもらえるようにした。fuxiに書き込んだ記録の一部を図1として載せる。

[英語教員志望] トピック	
2010年05月21日 00:39	花園小学校- 教職インターンシップで花園小学校へ行っています。 編集
書き込み	
2010年 05月21日 10:01	1: 朗読 5月18日(火)8:30~12:30 授業補佐 感じたこと・反省 ・駄目なことははっきり駄目ということ →書院の私が出てしまっている。先生という立場であるということ。 ・国語の時間での朝のスピーチ、私も探していたと感じた。 ・日々の生活をじっくりみてみて、毎日1つなにか見つけていこう。 ・100%の愛でほめること。 →ほめることの大切さは以前にも感じたが今回は身体でほめることの素晴らしさを学んだ。 ・授業への切り替えをどうながすか。 →これは今後の本人の課題でもあり、先生方と一緒に考えていきたいと感じた。
2010年 05月21日 10:12	2: 朗読 5月20日(水)13:30~15:30 授業補佐 感じたこと・反省 ・屋休みをはさみ、のぞみに遊びに来てくれるたぐさんの児童もいた。そのためクラスの子以外の児童との関わりがたくさんあった。 →休み時間は人との関わりあいができる大切な時間であることがわかった。 ・自分でやらせること。 →書院の私のみでいるだけで、児童に「〇〇先生〇〇やって〜」と書かれたときに「いいよ」と言ってしまうがその後先生に「自分でやるのよ」と声をかけられてしまった。そのような場面が何回かありました。 →前回の駄目なことは駄目ということをやって〜と書かれたときに自分でやらせることなど先生としての立場で関わり関わり方を現在模索中である。
2010年 05月25日 18:13	3: 朗読 5月25日(火)8:30~12:30 内容:授業補佐 感じたこと・反省 ・友達同士の問題を学級の問題として取り上げ、児童に問いかけていた。 →実践が見れてとても勉強になった。これはとても大切なことで、先生はきちんと丁寧に児童に働きかけていた。 ・教室は家庭-学校間で行っているということを感じることができた。 →厳しさの中にある希望や願いが見えてきた。駄目なことは駄目ということ。 ・授業の目的を明確にし、1回1回確認していた。 →話すスピード、問いかけの仕方を学んだ。 ・子どもは子ども同士の関わり合いが大切だということを見て学んだ。 →子ども同士の関係がさらに世界を広くする。 インターンが始まり、1カ月が経とうとしている。

	子どもたちのことも少しづつわかるようになり関わり方も具体的にわかってきた。こういうときにはこう、という流れもだんだんわかってきて、自分自身にある弱さも明確になり、残りの日々を考えると、1日1日たくさん学んでいきたいと思った。これからはSTEP2だな。
2010年 05月28日 01:57	5: 朗読 5月27日(木)13:30~15:00 内容:授業補佐 感じたこと・反省 ・障害は病気か →子どもたちはそう認識している。その場面に直面。 ・電子黒板を見た。 →子どもたちは興味を示し、楽しそうに授業に参加していた。 ・学級にはさまざまな学年の子がいてクラスとして一斉授業は難しい。 →個々の授業内容なのでその子に合ったペースで取り組むことができるが、同じことを勉強している子がいるから参加への意識が深まるのも思うので、児童がどのような環境で学ぶか、どのような働きかけをするのか重要だなと感じた。 →授業を準備していてもほとんどそれ通りに進まない。 →児童の集中力がもたないし、なかなか授業が難しい。 ・帰りのあいさつのときに全員を促していた。 →帰りに今日はみんな落ちた驚いていた。きちんと明確によかったことをその児童本人だけでなく全員の前で共有していた。それって素晴らしいことだし、話を聞いていてHAPPYな気持ちになった。 次回は学校訪問の日にある。教育委員会の方々が見えるそうです。この日にインターンシップがあることの意味を考え取り組みたい。学校内の雰囲気、先生方の雰囲気もいつもと違うと思うので前で見たい。私自身もきつと雰囲気が変わるだろう。
2010年 06月01日 17:20	6: 朗読 6月1日(火)8:30~13:30 学校訪問の日 内容:授業補佐 感じたこと・反省 ・今日は学校訪問の日で教育委員会の方々が見えた日だった。 私の格好もスーツだったり、先生方の雰囲気も違っていた。 児童たちの様子も違っていた。 いつもより落ち着きがなく、その気持ちさどろろしいかわからずイライラしていたり、わざと悪いことをしていたり、そういう行動が目立っていた。 →準備の裏側に敏感で、繊細なんだということを感じることができた。 ・先生が電子黒板で授業を行うためのPPTや各授業での教材を時間をかけて準備をされていたというのがわかった。しかし、スムーズに授業は進まず、準備してきたことのほんの少ししかできず、残念がっていた。 →一人人数だけ、一人ひとりの対応の大きさを痛感した。 ・授業だけだと認識が低く、先生も注意はするがなかなか授業に参加するということも難しい。そして働きかけも難しい。今までは弱い自分が出てしまっていたけれど、先生方の対応と適してきちんと今は授業中だということをはっきりと、取り組ませることが必要なので、今回は厳しく接してみた。 →書院は気づいていなかったが、集団の中で生活をしているということ考えさせられる。学校ということ、教育ということ考えさせられる。 →最後にやはり児童をほめていた。
2010年 06月04日 00:44	7: 朗読 6月3日(木)13:30~15:30 内容:遊園地(台風) 感じたこと・反省 ・事前に今日は遊園地訓練があるんだということきちんと理解させていたようだ。 →ひとりひとり丁寧に説明し、向き合せていた。 ・今日は練習ということを強調しつつも実際に起こったということ想定させるように身体全体でいろんなことを表現し、伝えていた。 →教師は役者である。特に障害児教育においては、言葉だけでは心に届かない。 →放送という文字ひとつにしても板書しながら、漢字がわからない子ども、まだ書けない子ども

図 1

5) 評価

単位認定・評価については、出席状況（授業および受け入れ校での研修日数）、授業での研修の振り返り発表、ディスカッションへの参加状況、研修日報、研修レポート、受け入れ校でのインターンシップ研修を担当・指導した教員からの所見・評価をもとに、総合的に評価した。

6) 研修内容

前期 10 日間以上、40 時間以上、学校における教員の仕事を幅広く体験する。仕事の内容は、学校と相談の上、あるいは学校の指定する仕事を体験する。以下に示す仕事をできるだけ多く体験する。

- 授業補助：T-T、総合的な学習の時間での指導補助、PC 実習の指導補助、英語の言語活動の補助、教材作成の補助、小テストの採点等
- 行事補助：文化祭、体育祭、音楽コンクール、英語スピーチコンテスト等での練習の指導補助

校外学習：野外活動等の支援・補助

部活動補助：技術指導・補助、顧問の補助

図書館業務の補助：図書整理

生徒会活動補助：学級活動や生徒会活動の補助

休み時間・放課後の活動支援：給食、清掃の補助

校務補助：学校便り・学級通信の編集補助、さまざまな印刷物の印刷・整理補助

進路相談：進路指導の支援

帰国・外国人生徒支援：日本語指導の補助、コミュニケーションの支援

7) 研修結果の記録

履修学生は、「研修出勤簿」への押印（図 2）、「研修日報」への記入（図 3）、fuxi への書き込みを、研修したその日に行い、「研修出勤簿」は、研修のすべてを終了した時点で授業担当者に提出し、「研修日報」は毎週の授業時に授業担当者に提出した。さらに、「研修レポ

インターンシップ出勤簿

学籍番号 _____
氏 名 _____

回	月 日(曜日)	場 所	時 間	主な活動	印
1	月 日()		時間 分		
2	月 日()		時間 分		
3	月 日()		時間 分		
4	月 日()		時間 分		
5	月 日()		時間 分		
6	月 日()		時間 分		
7	月 日()		時間 分		
8	月 日()		時間 分		
9	月 日()		時間 分		
10	月 日()		時間 分		
11	月 日()		時間 分		
12	月 日()		時間 分		
13	月 日()		時間 分		
14	月 日()		時間 分		
15	月 日()		時間 分		
合計	回		合計 時間 分		検印

図 2

ト」(図 4) を研修の最終日に書き、受け入れ校のインターンシップ担当教員に所見と評価をつけてもらい、研修のすべてを終了した時に授業担当者に提出した。

8) インターンシップ報告会 (省察会)

研修レポートの提出後、研修のまとめを最終授業で行い、受け入れ校の担当者、教育委員会の担当者を招き、履修学生からインターンシップでの学び、反省、今後の展望について発表し、そのあと受け入れ校の担当者と教育委員会担当者から講評を受けた。

6. 学校インターンシップにおける学び

学校におけるインターンシップの終了後、履修学生たちに記述式で意識調査を行っている。インターンシップに参加した動機はさまざまである。「教師になるために必要だと思った」、「教員の仕事を体験してみたかった」、「教育実習前にさまざまな経験ができると思ったから」、「教育実習では学べないことを学ぶことができるから」、「教科指導をする教師の姿だけでなく、実際に生徒とふれあう姿や授業以外の教員の役割を直にみて、多くのことを学び取りたいと思ったから」など積極的な理由ばかりであった。学校インターンシップに参加する前の心境

研修先学校名	愛知県立 阿久比高等学校	学籍番号	
研 修 日	2010年8月18日(水) 天候: 快晴	氏 名	
時 間	業 務 内 容	今日学んだことや所感	
8:45-9:15	○大掃除の手伝い 生徒達が集めて持ってきたゴミを回収する仕事をお手伝いした。	夏休み中だということにかなりのゴミの量で驚いた。それだけ沢山の生徒が部活動や文化祭の準備のために毎日学校に来てがんばっていることがよく分かった。	
9:25-10:20	○全校集会に参加 壇上での自己紹介と集会の最後に行われた身だしなみ点検に参加した。	全校生徒を前にした自己紹介はとても緊張したが、その前に職員室で先生方を前に挨拶していたので、なんとか落ち着いて話すことができて一安心だった。 夏休み中にあった大会で好成績を修めた生徒達の表彰やボランティア活動をした生徒達への激励の言葉もあり、勉強以外の所で生徒達が積極的にがんばっている学校だということが分かった。 身だしなみ点検では、スカートの丈の長さ、シャツの入れ方、爪の長さやマニキュアは塗っていないか、ピアスはあけていないかなど、女子については特に細かい部分まで一人一人丁寧に点検していた。先生方は頭ごなしに注意するのではなく、生徒と楽しく会話を楽しみながら点検をしていた。生徒と先生の仲の良さがよく伝わってきたし、ただきつく注意するというやり方では意味がない事が分かった。	
10:30-11:10	○1年1組のHRを見学	久しぶりのHR はとても新鮮だった。文化祭の企画について代表の2人の生徒が前で司会をしていたが、前の方の子しか話し合いに参加しておらず、後ろの子が自由に他ごとをしている様子が少し残念だった。1クラス40人という多さが原因の一つのように感じた。	

12:30-14:00	○阿久比駅を清掃するボランティアに参加	阿久比駅の清掃は、40人くらいのボランティアの生徒が参加し、トイレや階段の掃除から駅周辺の草取りまでを猛暑の中一生懸命やっていた。他の生徒から自分もこのボランティアに応募したが落ちてしまったという話を聞いてとても驚いた。普通ボランティアという足りなくて困ってしまうイメージがあったので、多くの生徒が自分からボランティア活動に参加しようという姿勢でいることに感動した。学校づくりにおける先生方の指導のたまものだった。
14:10-14:50	○掃除道具の片付け ほうき、鎌、バケツなどを清掃器具庫に戻し、使った雑巾を洗って干した。	ボランティア活動でクタクタになっても、教師にはまだ片付けという仕事が残っており、教師の仕事というのは本当に沢山あるなと感じた。
15:00-15:40	○明日の中学生の進学説明会の準備 体育館に椅子を並べた。	
明日の課題	・校舎の造りに早く慣れる。 ・生徒に積極的に挨拶したり話しかけたりする。 ・先生に指示されることだけではなく、自分で必要なことを見つけて動く。	

図 3

研 修 レ ポ ー ト

国際福祉開発学部	学籍番号	氏名	
研修先学校名	半田市立雁宿小学校	研修期間	5月19日～
研修概要、および全体的な反省点や今後の展望について			
<p>私は、5月19日からインターンシップ研修のため半田市立雁宿小学校へ訪問した。始めは緊張と不安だらけだったが、学校の雰囲気や先生方の印象から「これから頑張ろう」という気持ちになった。活動内容は、主に英語授業の見学や授業時の先生の補助、部活動指導、雑務などを行った。毎回の訪問で、授業の進め方や先生方の子供たちとの接し方などを学べ、多くの新しい発見があった。しかし、先生方や子供たちを外から客観的に見ていただけでは学ぶことも限界があることを感じた。そこで、自ら先生方や子供たちに積極的に関わっていかねば学ぶことも学べないと思うようになった。積極的に質問や声掛けなどを行うことで視野が広がり、今まで以上に新しいことに気付くことが出来た。自分の目で見ることや体験することは、とても大事なことだと思ったり、貴重な体験をインターンシップ研修でしているのだなと常々思った。</p> <p>私は、今回のインターンシップ研修を通して、主に感じたことが2つある。まず1つ目は、教師はとても大変な仕事だと思った。職員室や先生方の様子を見ると、ほとんどの先生方は1日の時間割が終了しないと各自が抱えている仕事に取り掛かることが出来ないと思った。インターンシップ研修中、教育実習の時期が重なっており、教育実習生への指導は、放課後の部活動が終わり次第、休む暇なく指導していた。来年、私は4年次に教育実習に行くので、このような場面を自ら当たり前にし、学校側は忙しい中で受け入れてくれていることを理解し、感謝をしなければいけないと思った。また、校務の先生と校内清掃を行ったが、子供たちのために学校をきれいに保つ意味でも体力仕事も教師の大切な仕事だと思った。そして2つ目は、教師はやりがいのある仕事だと思った。週1回で短時間の中での訪問にも関わらず、多くの発見や喜びを自分の肌で感じる事が出来た。「山岸先生、こんにちは。」「山岸先生、今日の部活来ますか？」など、子供たちが自分の顔と名前を覚えることやコミュニケーションを取ろうとするなど、ちょっとした成長を見たとき、この子供たちのためなら自分の出来ることをどんなことでもしてあげたいという気持ちが生まれた。私が短時間の中でも喜びを感じる事が出来たので、先生方は私の何倍もの喜びを感じながら日常生活を送っていると思う。子供たちの成長を見ることや喜びを感じることは、教師としてやりがいを感じるものの1つであると思った。</p> <p>私は、今回のインターンシップ研修で、普段の大学生活や4年次の教育実習では経験することが出来ないことを経験し、多くのことを学ぶことが出来たと感じている。今回、学んだことや経験したことを生かし、今後の人生に活かしていきたいと考えている。</p> <p>ご担当の先生から研修生へのアドバイスをご記入いただければ幸いです。</p> <p>毎週授業の補助だけでなく、アール掃除や溝掃除もすすんで していただきとても感謝しています。教師の仕事にやりがいを感じてく みつけられたいです。本当に良かったです。あと半年とがんばりますが今後 もいろいろ先生方にすすんで ご氏名</p>			

話しかけて自ら学んでいってください

研 修 レ ポ ー ト

国際福祉開発学部	学籍番号	氏名	
研修先学校名	半田市立 半田中学校	研修期間	平成22年5月13日～7月21日
研修概要、および全体的な反省点や今後の展望について			
<p>今回のインターンシップでは、「教員の教科以外の仕事」をたくさん見たり、経験することができた。とにかく教員は、1日にこなさねばならない仕事が多いことに驚いた。研修中に私が見ていた先生方は、朝から晩まで、どこに居ても生徒のことを考えていて、生徒のことを見ていた。きつと、自宅に帰るときも、休日でもそうだろうな、と思った。本当に子どもが好きで、他人のことを自分のことのように共感したり、悩んだりできる人でないと教師は務まらないことを実感した。</p> <p>教員の仕事で誰もが1番に浮かぶ教科の指導では、中1・中3の英語の授業と、特別支援学級の音楽の授業を拝見させていただいた。英語の授業では、生徒の集中を考えながら、興味心を持ってるように展開していくことが随分そうだった。講義形式のように教師が一方的に進めていく授業では、生徒が主体的に学んでいくことが少ないので、その中で学習していくことは、限りなく少ないと思った。やはり、英語は言語学習なので、学習者自身が声に出して、身をもって獲得していくことが重要だということを知った。また、生徒の学習意欲の向上のために、フィードバックの大切さも改めて実感した。そして、特別支援学級では、いくつかの工夫とともに授業が進められていた。見学させていただいた音楽の授業では、「和音は隠しから、単音で」と、生徒の発達段階に応じて課題を設定していた。楽譜も見やすいように作成されていた。</p> <p>研修を通して、「指導をする」ということは、『伝える』ということと同じ活動だということを見出した。そして、その活動には膨大な努力と工夫が必要であることに気づいた。私は、研修期間中に2つの掲示物の作成をさせていただくことができた。その時、私は「どうやったら生徒の目に留まるんだろう」「どうやったらみんなに伝わるんだろう」と、とても悩まながら作成に取り組んだ。完成して、掲示されたものがどれほど生徒に響いたかは分からないが、作成中はすごく生徒の顔が頭に浮かんだ。</p> <p>次に、担任の仕事では、教師の目と配りのすごさを知った。研修初日に、あるクラスの担任の先生にクラスの生徒の名簿を見せていただいたとき、先生は、名簿に記されていない生徒の性格・生徒同士の関係などをすらすらとお話してくださった。生徒と出会って1ヶ月経つが経たないかとても短い期間で、とても生徒のことを見ているんだな、と分かった。また、悩んでいる生徒がいると、先生は個人だけを気にかけるのではなく、クラス全体に何か問題があるのではないかと、目を光らせていた。生徒と関わる時間が限られている中でも、気を抜くことなくいろんな問題を考え生徒を見ていた。</p> <p>今までの私の学生生活の中で、たくさん教師を見てきて、単なる憧れで「教師になりたい」と思っていた自分が居たかも知れないが、今回のインターンシップを通して、教師の仕事は、とても大変だということをもっと知ることができた。しかし、その分、得るものや達成感も大きい。これを元に、教師になるという志気を高め、日々の勉強に励みたい。</p> <p>ご担当の先生から研修生へのアドバイスをご記入いただければ幸いです。</p> <p>2ヶ月間、ご苦労様でした。指導員の仕事や持点を丁寧に仕上げてくださり、ありがとうございました。ありがとうございました。一生懸命に頑張りました。先生と関わり、学んだ時間、本当に勉強になりました。ありがとうございました。ご氏名</p>			

研 修 レ ポ ー ト

国際福祉開発学部	学籍番号	氏名	
研修先学校名	日本福祉大学付属高等学校	研修期間	2010年5月6日～8月24日
研修概要、および全体的な反省点や今後の展望について			
<p>私は今回、半期の間日本福祉大学付属高等学校にてインターンシップをさせていただきました。研修内容は主にプリントの製版・印刷、授業見学、ワールドニュースミーティングの指導補助等から公開見学会のスタッフ、英語検定二次試験の指導まで様々な体験をさせていただくことが出来た。主に木曜の午後に研修をしました。ご指導させていただいた先生方はお忙しい中でも丁寧な指導をしてくださり、私自身楽しく体験させていただくことが出来ました。</p> <p>このインターンシップで私は多くのことを学びました。学校現場に実際に入り多くの体験をすることで、普段の授業では学ぶことが出来ない経験させていただくことが出来ました。指導者の立場として学校に入った時、私が見たものは以前私が生徒のころに見ていた学校とは大きく異なり、先生方がいかに少ない時間で大量の仕事処理しているのか、生徒を指導することの難しさなど、実際に現場に立たなくてはわからないことばかりでした。与えていただいた仕事はどれも初めてやることばかりで、戸惑うばかりで自分からもっと積極的に仕事をする事が出来なかったのが大きな反省点です。来年度に控えている教育実習では、この反省点を踏まえてさらに自分から積極的に生徒と関わりを持ち、様々なことに挑戦したいと感じました。</p> <p>また、この経験の中で最もうれしかったことは、私が指導と一緒に英語検定二次試験の練習していた生徒たちが二人とも二級に合格することが出来たことです。初めて実際の生徒に指導し、私自身も試行錯誤で手探りの中、生徒はまっすぐ私についてきてくれ、うれしかっただけでなく同時に私の指導がよかったのだろうかという不安もありました。しかし生徒たちの合格の報を聞き、私の指導が少しでも役に立ってよかったと心から感じました。生徒たちが先生方や私を信じ、生徒たち自身もたくさん努力をし、そして何かをやり返す。そのように生徒たちが成長していき、その成長や喜びを生徒とともに感じていくことが、教員の喜びのひとつだと身をもって経験することも出来ました。</p> <p>私が経験した内容はまだまだ教員の仕事のほんの一部ですが、このインターンシップを通して、教員になりたいという思いはますます強くなりました。なにより、実際の先生方はもちろん、生徒からもたくさん学ぶことが出来ました。来年度の教育実習では教科指導や学級経営も加わってきます。今よりもさらにたくさんこのことを経験し、考えなくてはならないことも多くなると思いますが、この経験を生かし、どんなことにも積極的に取り組み立派な教員になれるよう精進していきたいです。</p> <p>ご担当の先生から研修生へのアドバイスをご記入いただければ幸いです。</p> <p>真摯に丁寧にもっとにあってください。インターンシップの受け入れももの本校にとっても初めての取り組みになりましたが、卒業生のための研修もお願いしたいと思っております。ご氏名</p>			

は、「初めてのことなので緊張と不安でいっぱいだった」、「子どもたちや先生方に会えることが楽しみであった。不安というよりは、積極的に多くのことを学びたいという気持ちの方が大きかった」、「今まで学生立場で教師を見てきたが、生徒の前では先生として振る舞うことができるのか、生徒に写る自分の姿はどうなのだろうと不安でいっぱいだった」であった。学校インターンシップの体験を通して、期待通りの成果があったかどうかについて、「期待していた以上にたくさんの仕事を体験して、教員の仕事をよく知ることができた」、「実際に体験してみても、教員の大変さに驚かされたが、学びたかったことをたくさん学ぶことができた」、「期待以上のことを学ぶことができたし、自分の課題を身をもって知ることができた」、「期待以上に得るものが多く、この経験を継続していくことが重要であると感じた」など、全員が肯定的に答え、この成果を踏まえて、教育実習に向かうことができた。学校インターンシップの中で、一番印象に残っていることについては、「教員の仕事の多さに毎日驚いていた。それでも疲れを見せず、仕事に積極的に取り組んだり、生徒と笑顔で関わっている先生方のパワフルさ

に感動した」、「生徒の視点とは異なった視点で、教師の活動を間近に見ることができた」、「教員の仕事の大変さと子どもの元気さ・悩み・葛藤」など多くの学びと発見があった。受け入れ校と教育委員会からの講評では、「積極的に教員の仕事や生徒に関わってもらった」、「いわゆる雑用を大変よくやってもらった」、「学生のとても前向きな取り組みで、若い教員にも刺激になった」など、高い評価を受け、学生たちの教員志望への意欲がさらに向上した。

7. 学校インターンシップが教育実習に与える効果と両者の連結

教育実習前に学校インターンシップを行っているが、学生たちへの聞き取り調査から、「児童・生徒との関わり方に困難はなかった」、「学校の教育活動がどのようなものか、学校インターンシップで理解できていたので、スムーズに実習ができた」、「学校インターンシップで学んだことの確認や学校インターンシップで抱いた課題の解決に容易に取り組むことができた」など、教育実習に円滑に取り組むことができている。また、教育実習生の巡回訪問指導の機会に、指導教諭や教頭、校長から「あなたの大学からの実習生は、他の大学からきている実習生より動きがよく、生徒ともすぐに仲良くなり、明るく積極的に実習に取り組んでくれている」と好評を得ている。学校インターンシップを終えて、教育実習に入ることによって、教師という職業への意識の強化、なんとしてでも教師になりたいという意欲の向上、教師という職業理解のさらなる深化など、教師という職業に対する見方や考え方がプラスに働いている。教育実習前に学校現場でインターンシップを体験することにより、教育実習では、教員の動きや教員の立場でものごとを見ることができ、授業を行うことやホームルーム指導をすることによって、教員の仕事の大変さや難しさを現実的に即してよりよく知ることができる。学校インターンシップを体験し、教育実習に臨む学生に、その効果が教員になる魅力の増大、教員としてのやりがい、教員としての基礎力養成、学校現場における困難性の克服などに多大なプラスの影響を与えることは明らかである。

8. 学校インターンシップの課題

教育実習では、主に自分の母校で実習を行うことが多い。2週間から4週間と自宅ないしは下宿先から公共交

通機関、自転車、徒歩などで通い、実習に専念できる。通い慣れた学校であるからそれほど不便は感じない。しかし、学校インターンシップの場合は、大学での授業を受けながら、授業がない時間帯にやや遠方の受け入れ校へ通うことは、学生たちにとって大変苦勞が伴う。さらに、交通費は自分持ちということで、半期ないしは年間を通して活動することで、金銭的にも負担がある。

9. 学校インターンシップと教育実習の今後のあり方について

平成24年8月に中央教育審議会から出された「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について(答申)」の中で、取り組むべき課題として、次のようなことが述べられている。「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身につけていないことなどが指摘されている。こうしたことから、教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている。特に、いじめ・暴力行為・不登校等生徒指導上の諸課題は深刻な状況にあり、陰湿ないじめなど、教員から見えにくい事案についても子どもの兆候を見逃さず、課題を早期に把握し、警察等の関係機関と連携するなどして的確に対応できる指導力を養うとともに、教職員全体でチームとして取り組めるよう、こうした力を十分に培う必要がある」、「教育委員会と大学との連携・協働により、教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革を行う必要がある」また、平成18年7月、中央教育審議会が「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申を出している。その中で、「教職課程の履修を通じて、学生が教職への理解を深め、教職に就くことに対する確固たる信念を持つことができるようにするとともに、専門的な知識・技能を自己の中で統合し、教員として必要な資質能力の全体を確実に形成することができるよう、教職課程における教育内容や指導の充実を図ることが必要である」ことと、「専門的職業の一つである教員についても、社会構造の急激な変化や学校教育が抱える課題の複雑・多様化等に対応しうる、より高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある人材が求められている」と述べられている。

さらに、平成25年5月に、教育再生会議で出された

「これからの大学教育等の在り方について」第3次提言で、「大学は、課題発見・探求能力、実行力といった社会人基礎力や基礎的・汎用能力などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習法（アクティブラーニング）、双方向の授業展開など教育方法の質的転換を図る」と述べている。

こうした国の動きは、学校インターンシップと教育実習の連結や融合への追い風となることは間違いないであろう。これらの答申や提言を受けて、大学は学校インターンシップの定着と発展に伴って、学校インターンシップの実践例の調査や研究をさらに推し進めていくことが肝要である。

参考文献

- 原清治（2009）「現場体験活動は教員志望者の実践力を涵養するのか 学校インターンシップのもつ「効果」について考える」仏教大学総合研究所紀要第16号
- 山崎英則・北川明・佐藤隆編著（2005）「教育実習ガイダンス」東信堂

参考資料

- 独立行政法人日本学生支援機構・大学コンソーシアム大阪（2005）「学校インターンシップ導入マニュアル」
- 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ：2006年度文部科学省委嘱調査「教員意識調査」「保護者意識調査」中間報告（案）概要」
- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（平成18年7月11日）
- 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について（答申）」（平成24年8月28日）
- 教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」（平成25年5月28日）